

治山施設等の名称 「大規模崩壊地（加奈木谷のつえ）の復旧により地域を保全した大道南山復旧治山事業」

所在地 高知県 室戸市 佐喜浜町 大道南山国有林

工事期間 大正6年～昭和39年

施設・工法の概要

堰堤工等（空積、練積、混合積、蛇籠、玉石コンクリート）	99基	護岸工	1850m
土留工（空石、方格枠、蛇籠等）	28977m <sup>2</sup>	空張水路工	3800m <sup>2</sup>
丸太水路工	900m		
法切工	130598m <sup>3</sup>	筋工	136323m
植栽工	189000本	外	

解説（要約）

高知県室戸市佐喜浜町に位置する大道南山国有林に発生した45haに及ぶ大崩壊は、通称「加奈木のつえ」と呼ばれ、「日本三大崩壊地」一つとされている。当地区の復旧工事は、大正6年から41年間かけて実施され、当初の砂防植栽と云われた時代の工法から昭和30年代当時新工法と言われた工法までが網羅されており、溪間工、山腹工ともに治山工法の変遷や当時の積工技術の高さを伺い知ることができる。



復旧工事は昭和39年に完了し、現在は、植栽木の生育、郷土樹種の侵入により、溪床の安定とともに植生も回復している。

解説

（事業の経緯）

高知県室戸市佐喜浜町に位置する大道南山国有林に発生した崩壊地の起源は、延享3年（1746年）と伝えられ、また一説によれば宝永4年（1707年）の地震によるものとも伝えられており、以来復旧工事に着手するまで、延享の大崩壊より174年間も崩壊地の処理が行われなかったことから、豪雨、地震等の度毎に崩壊し、土石流による中流以下の被害は計り知れないものであった。当初崩壊の



被害は、沿岸約30戸、田畑50余町歩が流出したと伝えられている。

この崩壊による佐喜浜川下流の被害は累年増大したが、その原因の大部分が大道南山国有林の崩壊にあることから、大正6年に復旧計画を立て工事に着手し、大正14年から昭和6年までの中断期間を除き、戦中、戦後も続けられ、昭和39年に完成した。

(概要)

大道南山国有林は、佐喜浜川の最上流域にあたり、標高450m～1040mに位置しており、下流域には、国道55号線、佐喜浜町集落等がある。大道南山に発生した崩壊は、約45haの大崩壊で、崩壊の最下流より最上流部までの水平距離は1600mに及んでおり、通称「加奈木のつえ」と呼ばれ、「日本三大崩壊地」一つとされている。

当地区の復旧工事は、大正6年から41年間かけて実施され、当初の砂防植栽と云われた時代の工法から昭和30年代当時新工法と言われた工法までが網羅されており、溪間工、山腹工ともに治山工法の変遷を現地で見ることができる。特に、溪間工においては、大正時代の空積工から昭和初期の練積工、昭和30年代の玉石コンクリートまでの変遷や当時の積工技術の高さを伺い知ることができる。また、崩壊地内の最上流地帯は、全面的に地下水の湧水があり、この地下水処理の対策工法の検討に重点を置き、筋工を主体とした拡水工法の試験施行地として考えられた箇所もある。

施工は、大規模崩壊地であるため、縦横侵食を防止し下流への土砂流出を緩和する目的で、堰堤工、床固工等の溪間工を進めながら、可能な箇所から山腹工事を施工した。

緑化工種は、当初は植栽工、積苗工のみであったが、昭和25年以降は筋工を主体として施工し、昭和32年以降は植生盤を用いた筋工等を採用した。苗木の樹種は、昭和12年まではアカマツ、ヤシヤブシ、ヒメヤシヤブシ、昭和13年度以降は、この樹種の他にクロマツ、ニセアカシアを加えた。

昭和39年をもって復旧工事は完了し、堰堤工、護岸工等の溪間工の施工により縦横侵食を防止して溪床を上昇させる効果等はあったものの、山腹の傾斜はなおも急峻であり、完了当初は、礫等の移動が生じている状況も一部で見られていた。しかし、現在は、植栽木の生育、郷土樹種の侵入により、溪床の安定とともに植生も回復しており、昭和39年以降、下流域の保全が図られている。

この地域を含む室戸市全域は、室戸ジオパークとして平成23年9月に世界ジオパークに認定されており、「加奈木のつえ」は、地質遺産及び貴重な土木遺産として、ジオパークにおける22箇所の見所サイトの一つに指定されている。



## 推 奨

室戸市ジオパーク推進課長  
和田 庫治

加奈木のつえは、治山  
工事により崩壊地の復旧  
が図られ、昭和39年の復  
旧工事後は特に大きな災  
害はなく、現在は植生に  
おおわれています。

今後については、室戸  
ジオパークの見所の1つ  
として、PRを行い地域の  
発展や産業等に活用して  
いきたいと考えています。

